

V. 結語

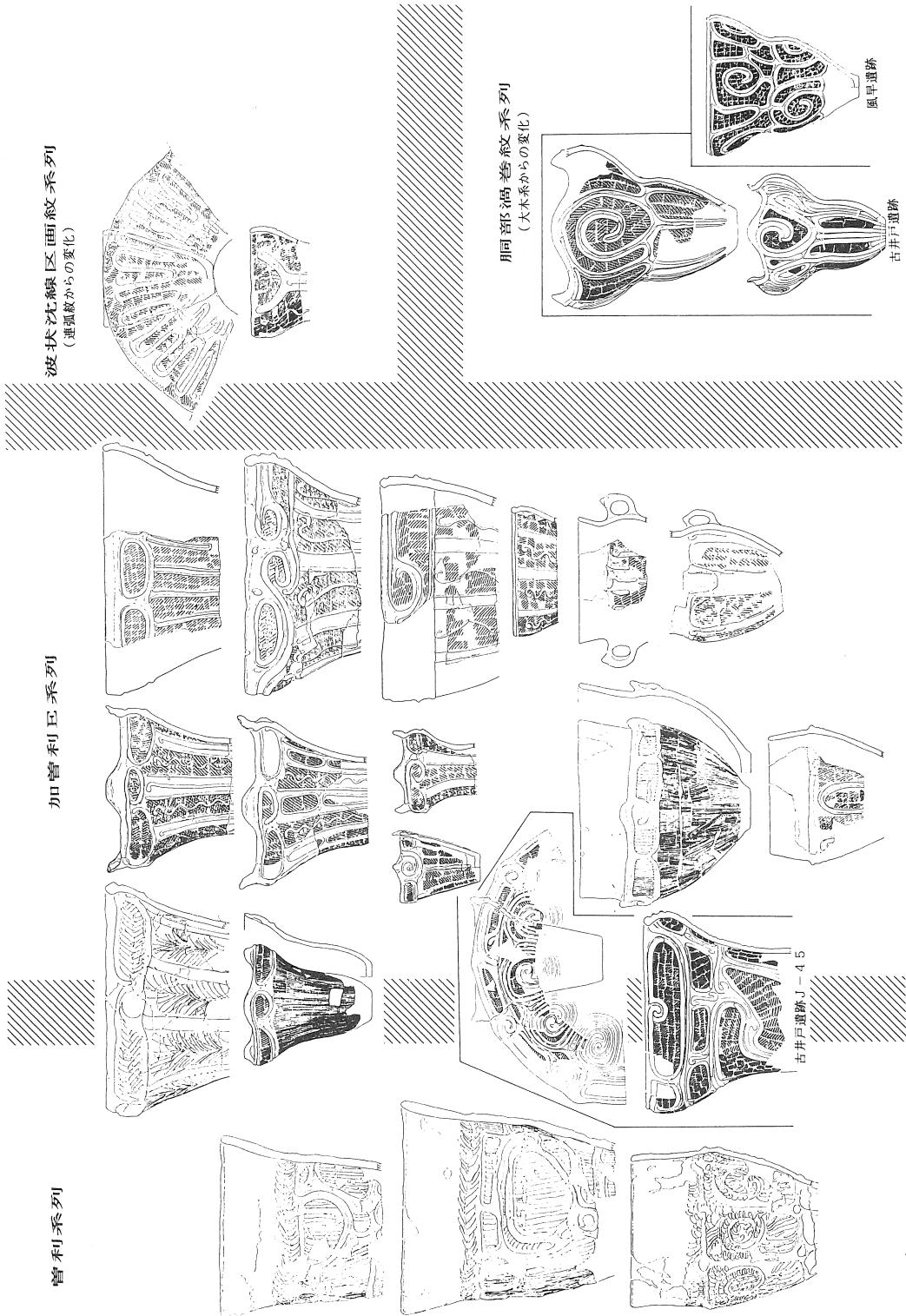
向山遺跡から出土した遺構と遺物は、縄紋時代中期加曽利E III式に属するものであった。しかしながら、遺物はいずれも細片であって全体をかいま見ることは難しい。ここでは、簡単に向山遺跡で分類した土器がどのような器形と紋様を持っていたかを復元しておきたい。同時に、向山遺跡の属する加曽利E III式の中から胴部渦巻紋系土器と呼ばれている一系列を注出して若干の検討を加えたい。

1. 向山遺跡出土土器の復元

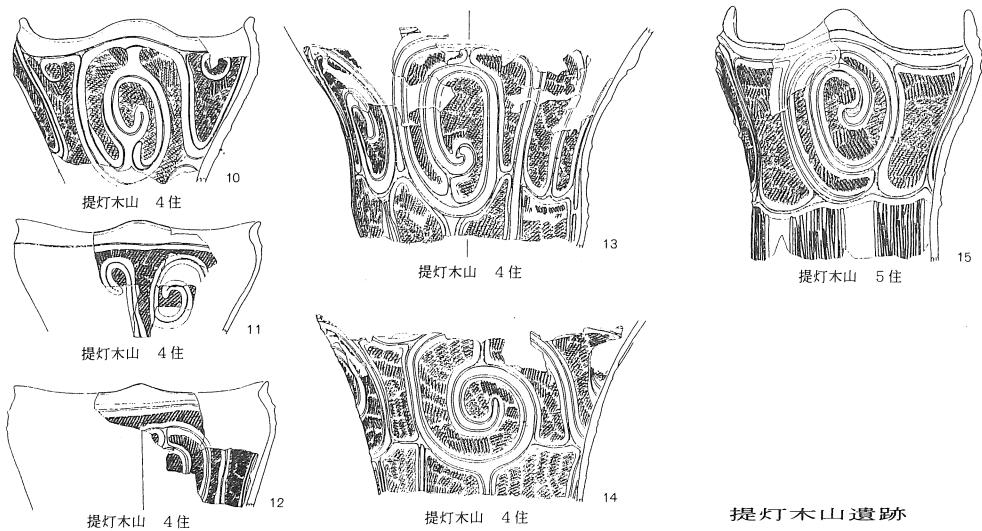
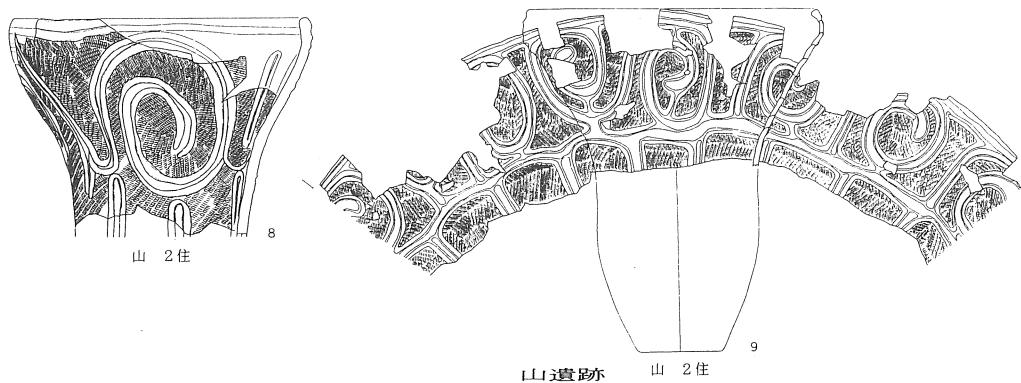
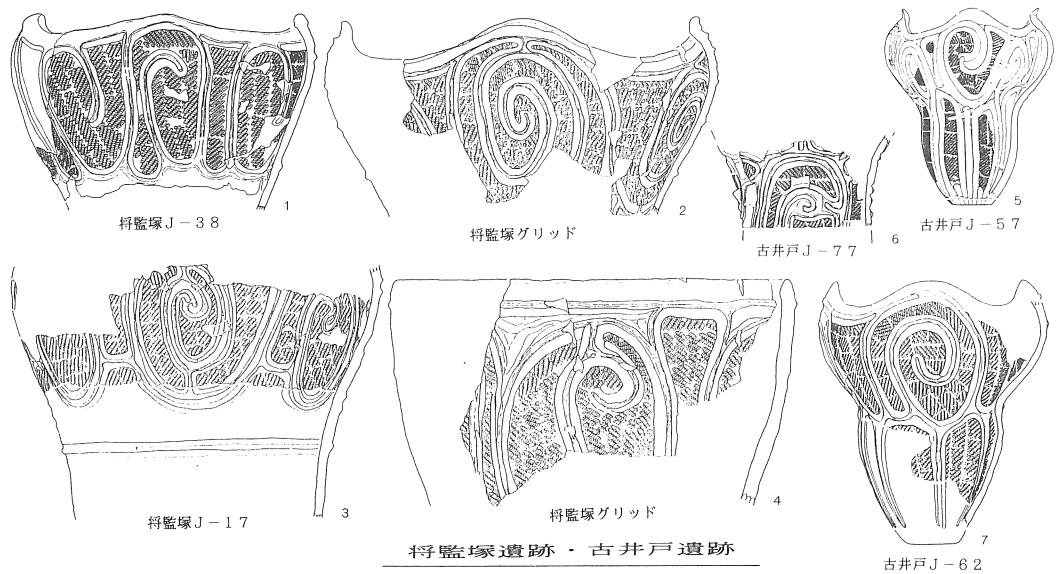
向山遺跡出土土器の口縁部を中心として、本遺跡では第2群土器を4類に分類した。この内、3類と4類は精粗の違いで同一の系列に属するものと思われるため、基本的系列は3つである。この分類は、埼玉県埋文編年に準じたつもりであり、筆者の加曽利E III式土器理解の基幹としておきたい。以下、良好な資料が出土している将監塚J-57号住居跡（第10図）を参考にしながら概観して行きたい。

向山遺跡第1類一加曽利E系列と仮称しておきたい。加曽利E式伝統の系列に属するもので、加曽利E II式から変化してくるキャリバー形の深鉢を中心とする。口縁部紋様帶（以下「1紋様帶」と呼んでおく）と胴部紋様帶（以下「2紋様帶」と呼ぶ）を引き続き配置することを特徴とする。この紋様帶配列を持つものは、曾利系列の一部分を除いては見あたらない。1紋様帶は、沈線や隆起帶によって楕円紋・渦巻紋・「の」字状紋等が描かれ、縄紋が充填される。2紋様帶は、充填磨消繩紋が配され縦位蛇行紋・「の」字状紋等が付加される。充填磨消繩紋が楕円紋に変化しているものも見られる。この他に、両耳壺や外反する口縁部を持ち胴部紋様だけが施紋される半精製土器等がある。なお、前述の1紋様帶と2紋様帶を持つ深鉢形土器の中には、2紋様帶に渦巻紋を持つもののが存在する。本遺跡では、不明確であるが、大木式の影響を受けて加曽利E式伝統の系列中に存在するものである（石坂・藤巻・桜岡 1988）。将監塚J-57号住居跡からの出土がないためJ-45号住居跡を図示しておいた。但し、次項で取り扱う胴部渦巻紋系土器とは系列を異にするもので、紋様が似通っているからといって同一視してはいけない。

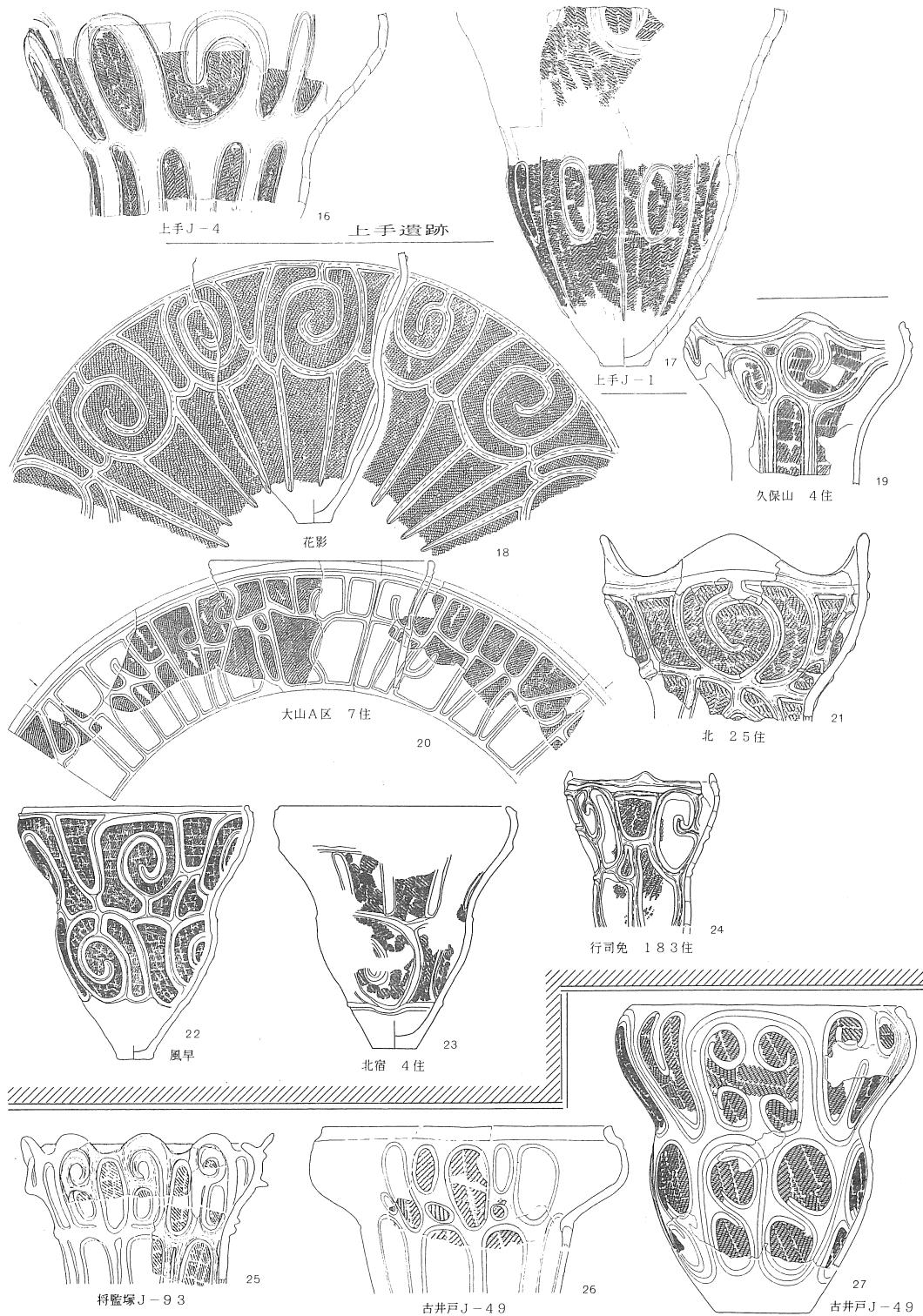
向山遺跡第2類一波状沈線区画紋系列の土器。口縁部は内彎し、胴部で緩く括れる深鉢形土器で、波状沈線区画紋を2紋様帶に描き1紋様帶を喪失するものを基準とする。明瞭でないが2紋様帶は、上位と下位に分かれるようで上位を「2a紋様帶」、下位を「2b紋様帶」と仮称しておきたい。この系列は、加曽利E II式連弧紋系列に変化が迫ると推測されるもので（笹森 1976）2a紋様帶・2b紋様帶の分帶も継続している。加曽利E III式になって1紋様帶が消失するのではなく、加曽利E II式連弧紋系列ではすでに1紋様帶が消失している点注意が必要である。同一器形で縄紋だけ、条線紋だけを施紋する粗製土器が伴う。この系列は、南関東から中関東にかけて分布するようである。



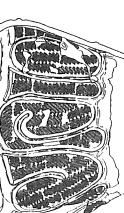
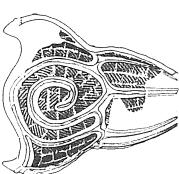
第10図 将軍塚J-57号住居跡を中心とした加曾利E III式基本系列

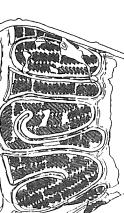
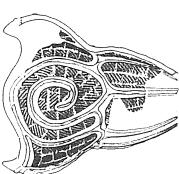


第11図 埼玉県における胴部渦巻紋系土器(1)



第12図 埼玉県における胴部渦巻紋系土器(2)

曾利系列	加口管利丘系列	波状沈線区面紋系列	同音偶卷紋系列
古井戸 J62			
			
			

曾利系列	加口管利丘系列	波状沈線区面紋系列	同音偶卷紋系列
古井戸 J62			
			
			

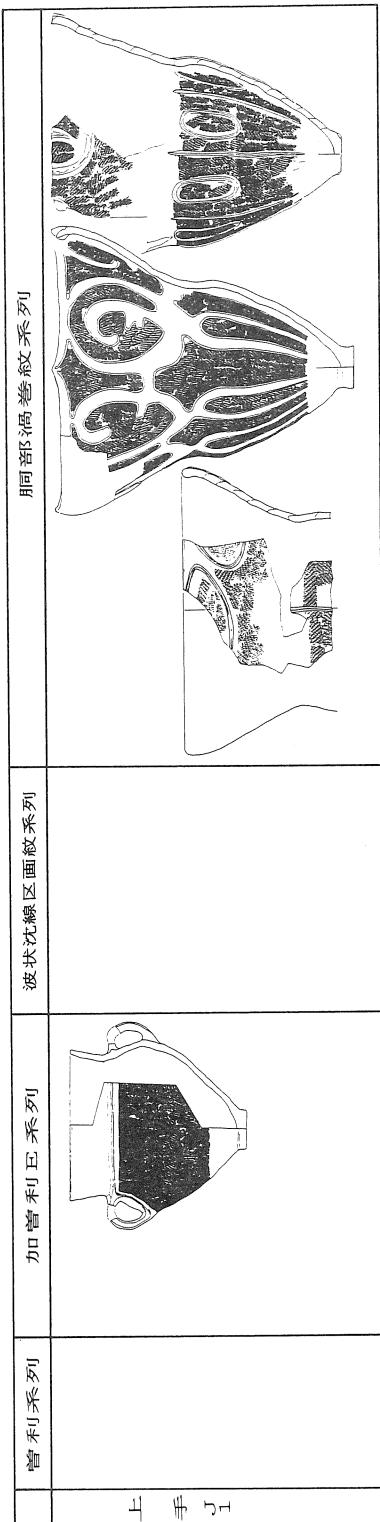
第13図 胸部渦巻紋系土器を中心とした遺構出土土器(1)

管利系列	力口管利丘系列	波状沈線区面紋系列	周唇渦卷紋系列
行司免 183住			
花影10住			
北25住			
北78土壤			

第14図 胸部渦卷紋系土器を中心とした遺構出土土器(2)

曾利系列	加口曾利丘系列	波打沈線区面紋系列	用同首形渦巻紋系列
大山△区7住			
山2住			
山4住			

第15図 脊部渦巻紋系土器を中心とした遺構出土土器(3)(a)



(b)

向山遺跡第3類—胴部渦巻紋系列の土器。口縁部は内彎し、胴部で括れる深鉢形土器で、隆起線・沈線による渦巻紋を2紋様帶に描き1紋様帶を壊失するものを基準とする。この系列の生成については、明瞭でないため今後の追求が必要である。波状沈線区画紋系列と同様に「2a紋様帶」・「2b紋様帶」におおよそ分けられる。本系列は、東部関東に分布の中心を持つ。将監塚J-57号住居跡からの出土がないため、古井戸遺跡例と風早遺跡例を図示しておいた。

向山遺跡で未検出の系列—曾利系列の伝統下に成立する系列である。埼玉県の中央以南ではあまり検出されない。埼玉県北・群馬県方面に分布の中心を置き、ある意味で胴部渦巻紋系列と対立（紋様が相似する分だけ）する。1紋様帶と2紋様帶に分帶し、条線・沈線・綾杉状の沈線を充填する。地紋だけ異なっているが加曾利E系列に似通って、タイプと外反・直立する器形を持ち、口縁下を無紋とし、2紋様帶に隆起線による渦巻紋に相似した紋様を配し（谷井の分析がある 谷井 1989）（註1）集合沈線を充填するタイプの2者がある。

以上、向山遺跡出土土器の大まかな復元をおこなった。向山遺跡は、少數の加曾利E系列・波状沈線区画紋系列・胴部渦巻紋系列の3つの組成からなっている。言い替えれば、4つの系列の増減が地域差を現すのである。

2、胴部渦巻紋系土器について

加曾利E III式土器の中で特に胴部渦巻紋系土器を注出して、その特徴・他の系列との伴出関係について簡単に述べたい。（注2）

[器形について]

1. 平縁深鉢形土器と波状口縁深鉢形土器がある。
2. 口縁部は、急激に内彎するが多く、胴部中央付近で括れて底部にいたる。久保山遺跡4号住居跡は、括れ部が上位にあり加曾利E系列の影響を受けている。将監塚遺跡グリッド例は、口縁部が直立して括れ部を持たないようである。

3. この系列の器形は、独自性をもっており他の系列と